台湾留学についてのレポート

2019/9/25 工学院 学部一年 関根 史人

今回、台湾科技大学の留学を修了致しましたので、レポートをまとめたいと思います。

まず、今回の留学は東京工業大学、徳島大学、九州大学の学生が台湾科技大学の学生と合同でプログラムを進める形で行われ、プログラムの内容としては台湾科技大で行われている研究の紹介と、台湾の企業や研究機関への訪問で半々となっておりました。

台湾の学生との交流については、プログラムで台湾の学生と協力しながら活動したり、放課後に台湾の観光に連れて行ってもらったりしました。一部の台湾の学生は日本語が少し話せますが、他の学生は英語か中国語のみであるので、自分は英語でコミュニケーションを取ろうとしましたが、英単語の発音が自分の発音と異なる部分が多くあり、聞き取れないことも多々ありました。今まで、日本語が通じない相手とのコミュニケーションを取ったことはほとんどなかったため、非常に貴重な体験をすることが出来ました。コミュニケーションを取ろうとするときは、英語自体があまり伝わらないため、身振り手振りなど感情を込めて表現する必要があり、実践的なコミュニケーション技術を磨くことが出来ました。今後の英語学習では、今回のことを踏まえて発音や単語を重視していくモチベーションを得ることが出来ました。

企業見学については資生堂や、GARMIN、ULVAC、SYM、KINIK など様々なところに行くことが出来ました。その中でいくつかを抜粋してまとめようと思います。

まず、KINIK については一般研磨材を扱っている中小企業で、工場では多くの従業員が働いており、ライン工程ではなく従業員が職人のような形で働いており、自分の中にあった東京の下町の工場のようなイメージと当てはまり、非常に興味深いものでした。

次に、SYM については現代自動車からのライセンス生産で自動車の生産と、バイクの生産を行っている大企業で、長いラインで非常に多くの従業員が働いておりました。自動車やバイクなどの大型機械のライン生産を見学したのは初めてであり、いかにラインを止めずに生産を続けられるか、品質を保ち続けるか、など多くの観点で学ぶことが出来ました。

最後に、GARMIN についてです。GARMIN は様々な GPS の開発を手掛けるグローバルな大企業であり、その工場は Industry4.0 を目指したスマートファクトリーであり、基盤の部品取り付け工程は多くの細かい部品を管理するためにコンピュータ制御されたスマートストレージによって管理されておりました。品質管理も専用の検査装置を用いており、今後世界が目指していく Industry4.0 の姿をイメージすることが出来るようになった他、３種の異なる姿の工場を見学したことで、産業に合わせた工場のあり方を考える視点を得ることが出来るようになりました。